

みずがね きよい 永 浄  
 すさまじい あさい 凄 淺  
 どころ しずむ 淤 淪  
 にこる ふさく 渾 湮  
 はやらせ とどまる 漑 滯  
 しずむ みたす 湍 湔  
 かわる およぐ 渝 游  
 たに ひろい 溪 滉

# 水の文化書誌 ④ 《アジアの水》

アジアの国々は歴史、民族、気候とそれぞれ異なるものの、水の文化については「水の神」、「水辺空間」、「灌漑農業」に関する書が数多く刊行されている。

那谷敏郎著『龍と蛇 ナーガ』（集英社、2000年）は、龍蛇ナーガ（インド神話に表れる大蛇・龍のことで、宇宙の最下層をなす冥界・水界・地下界を代表するといわれる）が統治者の権威の象徴となっており、さらには水の神としてアジアの人々の暮らしの中に息づいていることを著している。ネパールでは、少女の生き神であるクマリが、ナーガの首飾りをつけている。ナーガは雷による火災を避け、慈雨をもたらすものと崇められている。

スミット・ジウムサイ著『水の神ナーガ』（鹿島出版会、1992年）では、タイのバンコクを取り上げている。チャオプラヤー川、ターチン川、バーンコン川が運河で結ばれており、高床式木造による寺院の僧坊、講堂、経堂は水際に建立され、住民は移動可能な水上集落を形成、日常生活で水の神ナーガを敬い、水環境と調和した水辺文化をつくりだした、とある。

ナーガに関わるヨーロッパとアジアの比較については、勉強出版編集・発行『アジア遊学（第28号）ドラゴン・ナーガ・龍（2001年）』が興味を惹く。

水の神ナーガに守られたカンボジアのアンコール・ワット、アンコール・トムは12世紀から13世紀にかけて造営された宗教都城である。ベルナル・P・グロリエ著『西欧が見たアンコール』（連合出版1997年）は、これらの都を満々と水をたたえた水路網に囲まれた、巨大な水都市と位置づけている。この書の中で石澤良昭氏（上智大学教授）は、水利灌漑網により、年二毛作となり、高度な農業生産高がアンコール朝の繁栄をもたらしたが、さらなる寺院の建立のための過度な熱帯林の伐採と土地の開発が、やがて降雨量の減少をまねき、森林の保水機能を失わせ、この結果、水利灌漑網の破綻をもたらした。隣国シヤム（タイ）に敗北したことと相まっ

て、アンコール朝滅亡の一因となったのではないかと解説している。

藤田和子編『モンスーン・アジアの水と社会環境』（世界思想社、2002年）でも、アンコール朝の水利都市が考察されている。

カンボジアには、ボル・ポト派が引き起こした虐殺と飢えという、不幸な時代があった。清野真巨子著『禁じられた稲』（連合出版、2001年）には、1975年から78年にかけて、ボル・ポト政権が国民を巨大な貯水池、水路、堤防の建設に駆り出させ、伝統的な浮き稲栽培を禁止させたこととある。この建設は、貧困脱却のため、アンコール朝の水利灌漑網による農業繁栄の再現を図ったものと著者は推論しているが、長大な水路建設は失敗に終わり、今でもほとんど使用不可能なまま、全土に残っているという。

榎根勇著『水と女神の風土』（古今書院、2002年）は、ヒンドゥー文明とサラスヴァティー女神バリ島の稲作社会とスリ女神を論じる。バリ島にはスパックという伝統的な水利システムがある。これは、取水堰からトンネル、水路、分水堰、末端水路まで水を公平に配分するための仕組みで、通常、共通の水源を有し、1つ以上の分水寺院を持ち、規約・水利組織を持ち、取水堰の近くに堰堤寺院がある場合が多い。取水堰や分水堰のわきに、必ず祭壇が造られ、水の神デワ・ヴィシヌが祀られている。また、水田の中にはあちこちに稲の神デウィ・スリを祀る小さな祭壇が設けられている。

家永泰光著『東南アジアの水』（アジア経済研究所1969年）では、スパックの定款規約が紹介されており、「組合員は寺を造り、水の神及び稲の神を祭らねばならぬ。植え付け前灌漑当初において祭りを行う」と記されている。さらに、植え付け後、年3回豊稔祈願祭を行い、祭りの費用はすべてスパックの負担と規定されている。このようにバリ人が水の神や稲の神を水利制度に取り入れ、敬愛する精神には驚かされる。

さて、通商の拡大によって、アジアの沿岸部分には、物資の集産地、積み替え地、風待ち地、水の補



